

追悼

文学部日本文化学科教授の石川清之先生は、二〇〇六年（平成一八）二月十五日、御年六十四歳にて病氣のためご長逝されました。本来この論集は、石川先生のご退職を控えての記念号にするよう企画し、先生のご寄稿をお願いしていました。誰一人考えなかつた石川先生のご急逝は、学科の教員と学生にとつて哀惜するに余りあります。ここに、石川清之先生追悼号を発刊し、先生とともに歩んできた文学部日本文化学科を振り返るとともに、これからの再出発の節目を祈念することで、感謝と惜別の気持ちを捧げたいと思います。

一九九八年（平成一〇）に本学文学部日本文化学科にご着任された先生は、新設された日本文化学科の歩みとともにあられる存在です。日本近現代史という学科の基軸科目を担当していただき、ご着任二年目には学科主任を務めていただいて、模索の中で学科運営にあつた私たちを導いてくださいました。ご論文から知られる先生のご研究内容が、どのような経緯で進められたのか、入学式や卒業式の日には学生たちを前にして語られるお話を、興味深く拝聴することたびたびでした。

織物業と地主制を研究テーマとして一九六五年（昭和四〇）に名古屋大学を卒業された先生は、二年間の銀行勤務で得られた現代経済事情への知見を加えて、あらためて大学院に進学されたと聞きます。連鎖的に課題を発見される先生は、織物の生産・流通構造を知るために原料の綿糸生産の研究へ、そして紡績技術としての明治期のガラ紡研究へ、その動力源たる水車の研究へ、という具合に展開されたようです。「日本史学概論」「日本史学（近現代）」「教養演習」など、受け持たれた授業の中でも、問題意識に即した学術内容のご教授があつたにちがいません。社会や人間のあり方は究極的には経済に規定されている、というはつきりした視点を学科学生向けの自己紹介文に書いておられた先生は、原始・古代から現代にいたる通史構想を持っておられた点、特筆すべき事と思います。

ご赴任されたところのお元気さは、学科行事へのご参加のお姿に、多くの者が記憶しているところですが、印象的な場面としては、二〇〇〇年（平成一一）五月三日、教養演習の一環として一年生とともに瀬戸市の海上の森を歩いたことがあります。愛知万博の工事が始まる以前の現地見学を兼ねていました。ぜひ一度訪ねてみたいということで、登山姿でお見えになりました。広大な尾張の丘陵と平野を眺望されたあと、「三十年ほど前に来たことがあることを思い出した」とおっしゃりました。お若いころの活動性を想像するとともに、いかにも石川先生らしいその場の何気ないご発言は、とても印象深い響きでした。

寡黙な石川先生が、ご退職記念に書いていただく予定だった論文には、私たちへのメッセージがこめられるのではないかと密かに考えていました。かなわないこととなりましたが、今、この追悼の機会に私たち日本文化学科の歩みを振り返り、今後への糧とさせていただくことで、これまで石川清之先生からいただいたご教示を生かしたいと思えます。

石川清之先生、安らかにお眠りください。

二〇〇六年十月二十六日

日本文化学科主任

上川 通夫



2000年5月3日 海上の森にて（右後方2人目）